

5. 2 2 交通事故に係わる基本的な考え方に基づく課題考察（3）

『四国遍路旅日記』を読んで（図書館だより投稿文）

秀光中等教育学校
仙台育英学園高等学校
校長 加藤 雄彦

平成十八年を迎え、四国高知県室戸岬に近い四国八十八霊場第二十七番札所神峯寺（このみねじ）で新しい気持ちで戌年を過ごす決意と昨年五月二十二日の交通事故犠牲者三人のご供養をすることができた。時間の制約から歩きお遍路（歩道もなく道路事情の悪い場所は車を併用する）を区切り打ち（ある霊場から区間を決めて巡拝する方法）しながら、正味十八日間費やしてきた。

齋藤 大君、三澤明音さん、細井 恵さんたちにはそれぞれ夢や希望があった。それを一瞬にして奪い、事故現場で被害者を救出する義務を放棄し、われわれが絶望している様子を平然と窺っていたあの犯人を思い出すとき、はらわたが千切れるような怒りと嫌悪感を抱く。

あの事故以来、ご遺族にどれだけ気持ちを伝えることができただろうか、どのような言葉をお掛けすることが最善なのか、と考えれば考えるほど答えが出てこなくなる。

このように自問自答を繰り返していた頃、細井 恵さんが住んでいた加茂一丁目町内会長の星 忠志（ほし ただし）さんが来校され、生徒会が始めた飲酒運転撲滅署名運動の署名簿と自著『四国遍路旅日記 歩き遍路は感動の連続だ』（二〇〇二年十月二十日発行、発行者星 多美子夫人、丸善仙台出版サービスセンター制作）を持参され、ご寄贈いただいた。応対した先生たちを激励し、ご自身のドイツでの交通事故体験をお話されたと同じ、有難い方が世の中にはいらっしゃると思いつつ、この本を拝読した。

本を読み進むと、陸上競技部が二〇〇二年五月から始めている四国八十八霊場巡拝「至誠願行」の研修と重なり、夢中になって読み終えてしまった。

著者の星さんはおおよそ千百キロの遍路道を歩かれ、四十五日かけて通し打ちされた強靱な肉体と不撓不屈の精神力をお持ちの方である。加えて、緻密な計画を立てる能力と人びとに勇気と光明をあたえる性格の持ち主だと読後の印象を持った。そして、お遍路を始めるきっかけがドイツでのあの交通事故で九死に一生を得たことだったことも知った。

そのことが分かった時、亡くなった三人とご遺族にささやかではあるが気持ちを伝える方法が見つかったように思えた。

そこで、三人のご冥福を祈願するため、ご遺族のご了解をいただいた上で、ご遺影をお借りし、かれらの納経帳に名前や戒名を記していただき、思い出の写真を添付してもらった。そして、それらをリュックに背負って、それぞれの霊場を巡拝することとなった。お寺のご本尊さまに写経を納める代わりに「般若心経」を唱え、お参りした証としてくださる朱印を納経帳にいただきながら、次の霊場には原則、徒歩で向かうこととなった。霊場間で最も長い距離を歩

かなければならなかったのは第三十七番「岩本寺」から四国最南端の足摺岬にある第三十八番「金剛福寺」までの八十キロの道のりである。いまでこそ、遍路道も舗装され、全部ではないが歩道もあるし、山野にある昔ながらの道も地元の方々の奉仕活動の結果、整備され、歩きやすくなったと思う。しかし、いまから千年前の遍路道を思い浮かべてみると歩行困難な危険な場所や水もなく行き倒れてしまう難所が多数存在したはずであり、何よりも「草鞋（わらじ）」で長距離歩くことにどれだけのご苦労があったかは容易に想像できる。

第三十八番までの途中、土佐清水市の大岐（おおき）の浜で「波供養」のお勤めをすることができた。白浜に「金剛杖（こんごうづえ）」で「南無大師遍照金剛（なむだいしへんじょうこんごう）」や故人の戒名や願い事を書いて祈ると、打ち波と引き波がそれを流してくれる。

夕闇迫るなか、金剛福寺に無事到着し、早速ご本尊「三面千手観世音菩薩（さんめんせんじゅかんぜおんぼさつ）」の前に三人のご遺影を並べ、読経を済ませ、お大師堂にもお参りしてから、真っ暗闇となった境内にある宿坊にお世話になることとなった。一晩中、断崖に碎ける太平洋の荒波の音と櫓のむせ返るような香りに包まれながら、瞬く間に朝のお勤めの時間を迎えた。

ご住職の長崎勝教（ながさきしょうきょう）先生は高知学芸高校のご出身で中国上海市の鉄道事故で修学旅行中の多数の同校生徒、教職員が死傷した出来事に触れられた。「人は事故に遭遇して、自分が死んでいたかもしれないと想像することができる。他人の起こした事故をみて、その事故で死んでいった他人に成り代わって、自分の死を想像することもできる。死を見つめることによって、生の存在が認識できることを前提に、生きる者は亡くなった者から命の大切さや尊さを知ることとなる。このような心の連鎖を通じて、死んだ後も亡くなった者が安眠できる世界を想像し、死ねばすべて無くなってしまうという不安から解放し、死への恐怖を感じなくなっていくことができる」と話された。

法話の内容が私の心の中にあった空虚な隙間を温かいもので埋め尽くしてくれる満足感を感じることができ、思わず手を合わせ、「南無大師遍照金剛」と弘法大師の御宝号（ごほうごう）を三返唱えてしまった。

学校行事を開催している中で、交通事故犠牲者三人をだしてしまった悔いは生涯残っていくことだろう。と同時にかれらが教えてくれた心の連鎖こそ、みなさんが良き人生を過ごすため、死を見つめて生きる意味を考える大事なきっかけとなるでしょう。かれらの尊い命が飲酒運転撲滅運動の精神的柱として存続していくこと切望し、二度とこれほどの悲しみを生む事故が再発しないための方策を確立していかなければならない。

（平成18年1月5日）